オリエンテーション――ヘレニズムとヘブライズム
１．存在論と聖書
２．創造――フィロン、アウグスティヌス　　３．契約――社会契約説
４．知恵――カント
５．堕罪・悪――リクール　　６．歴史――ヘーゲル
７．神の国と終末――アウグスティヌス、ヨアキム
８．愛――パスカル　　９．自己――キルケゴール
１０．死――ハイデッガー
１１．永遠――波多野精一　7/2
１２～１４．受講者の研究発表　7/9（田中吉隆、ブラジミロブ　イボウ）
7/16（張 舒青、平出貴大）, 7/23（齋藤伎璃子、立川瑛世）

＜前回＞自己――キルケゴール
０．これまでの講義内容から
悪・罪と自由意志論　→　問いとしての自己
自己の不透明性・脆弱性
有限性、罪責性、無意味性（ティリッヒの不安の類型論）

（１）キルケゴールの自己論
１．『死に至る病』（岩波文庫、1849）：絶望の現象学から絶望として罪論へ
第一編　死に至る病とは絶望のことである
一　絶望が死に至る病であるということ。
Ａ，絶望は精神におけるすなわち自己における病であり、そこでそこに三様の場合が考えられうる。――絶望して、自分をもっていることを意識していない場合（非本来的な絶望）。絶望して、自分自身であろうと欲しない場合。絶望して、自己自身であろうと欲する場合。
２．反省や参照という概念は、人間存在の基本構造に関して使用され、精神や自己といった人間理解の基礎概念として位置づけられる。
「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものになることが含まれている、――それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然性との、綜合である。綜合とは二つのものの関係である。しかしこう考えただけでは、人間はいまだなんらの自己でもない。」（20 頁）、「関係がそれ自身に対して関係するということになれば、この関係こそ積極的な第三者なのであり、そしてこれが自己なのである。」（21 ）
「自己は無限性と有限性との意識的綜合であり、自己自身に関係するところの綜合である。自己の課題は自分自身となるにある」、「自分自身になるというのは具体的になることの謂いである。」（46）　「生成の途上」（47）
３．「精神」「自己」としての「人間」:「関係が自己自身に関係する関係」という仕方での自己関係、つまり自己参照性によって特徴付けられている。自己関係は、反省や参照（あるいは言及性）一般がそうであるように、自己自身に関係することによって、最初の自己関係を変化させ、そこに生成のプロセスを生起させる。これは変化における自己同一性あるいは自己同一性の変化、さらには自己言及のパラドックスなど、人間存在に特有の問題を派生させる。
可能性としての絶望　→　不安

（２）近代と制度的自己再帰性――ギデンズ
４．近代と不安、近代的な不安の現象形態
５．ギデンズの近代社会論における「再帰性」（reflexivity）概念――「A　についての言及

が、A 自体に影響を与えること」――。
６．人間存在の基本構造
→　近代特有の現実性としての「制度的再帰性」(the institutional reflexivity)
人間存在の基本構造の近代特有の特殊的現実化・形態化。
つまり、再帰性が社会制度として存在すること、ここに近代的システム特有の問題が認められる。
７．制度的再帰性の具体的形態としてのが近代的知。
近代的知の特性は、「モダニティでは根本的懐疑の原理が制度化されており、そこではすべての知識は仮説のかたちを取らざるをえない」(Giddens, 1991, 3)という点に現れている。
８．再帰的知識の典型としての近代科学的な知：繰り返し検証されることを自らの内に組みこんだ知識、つまり、「仮説－経験的検証（実験)」プロセスにおいて構造化された知識。科学者集団という担い手によって制度化されている。
９．キリスト教神学の場合。
10．パネンベルクが指摘している宗教戦争後の教派的多元性の状況。
神学的知における再帰的メカニズムの作用というべき事態。制度化（大学と出版)。
パネンベルクやヒック：神学的知の仮説性
懐疑という再帰的営みを制度化することにより（懐疑の制度）
→　既存の「確実な知」を解体。
伝統的な宗教的な権威（聖書や伝統、そして啓示）も例外ではない。
→　近代聖書学の成立は、この懐疑の制度化を象徴する出来事。
近代のキリスト教神学では、方法論や知の基盤をめぐる議論（体系のプロレゴメナ）に多くの努力が傾けられることになる。
13．制度的再帰性としてのモダニティの自己修正・自己拡張的な動態。
社会システムの外部の問いは内部へと繰り込まれ、「外部」という仕方では存立し得ないことになる（自然主義・歴史主義)。近代的な知の営みにおいては、「神」でさえも、たとえば、人間の類的本性の投影として、社会システム内部で処理される。
14．一切の伝統や権威の解体、伝統的宗教のモダニティのもとにおける根本的な危機。
15．モダニティは伝統的宗教を解体するとしても、人間存在の可能性としての宗教性までをも排除することはできない――モダニティも宗教・祈りも再帰性を共有している――。
＝ギデンズの言う「抑圧されたものの回帰」という問題。

１０．死――ハイデッガー

（1）死の問いと人間の問い

１．人間論：人間とは何ものか？
参照軸の移動：神に対して、他の動物に対して
２．被造性と有限性の緊密な結びつき
↓
死＝存在（今・現在）の消滅（無化）
人間固有の可能性としての死、死を可能性として意識すること
哲学的思惟と死：プラトン、そしてハイデッガー
死は、人間にその本来性を開示する。
３．「肉体（ソーマ）は魂の墓（セーマ)」(『クライチュロス』400C、『パイドロス』250C、)『ゴルギアス』493A)、「知を求める哲学者は、死をねがい、死を恐れず、死をつとめとする」(『パイドン』、「哲学とは死の練習」80E-81A)。魂の不死性。
４．「そもそもわれわれが生の自己矛盾に追込まれたのは、生の直接なる享受を無反省に追及し、その結果、生は常に死に裏附けられ、何時その表裏が顚倒して、死が表に現れ生が裏に追いやられるかわからない、という自覚を失うからである。すなわち正に、「死を

忘れるな」という戒告に反して死を忘れる結果なのである。」（田辺元「メメント・モリ」（『死の哲学』岩波文庫、16頁））

（２）ハイデッガーと「死」の哲学

５．ハイデッガーの『存在と時間』、内在主義

６.『カントと形而上学の問題』理想社、1967年。（*Kant und das Problem der Metaphysik*, 1929.）

「形而上学の基礎づけに対する源拠は人間の純粋理性であり、しかもこの基礎づけの問題性の核心にとってはまさに理性の人間性ということ、換言すれば、その有限性ということこそ本質的なものとなる」（36）

「認識とは表象作用である」（37）

「神の認識は、直観することによって直観すされうる存在者そのものを始めて創造するような表象作用である。しかるにこの表象作用は、存在者を始めから端的に洞見して、直接に全体として直観するから、思惟を必要としない。」（38）

「人間の認識の有限性は従って、まずこの認識に固有な直観の有限性のうちに求められなければならない。有限な認識者が思惟「も」しなければならないということは、この認識者の真理の有限性から始めて生じる一つの本質的帰結である。」（39）

「有限な認識は創造的ではない直観である。この認識が直接表示する個別的なものは、予めすでに現存していなければならない」、「派生的認識」、「直観の有限性という性格は従って受容性に存する。」（40）

７．辻村公一「ハイデッガーの根本経験」（『ハイデッガー論攷』創文社、1971年、105-150頁）

「ハイデッガーの哲学は「有の意味乃至有る真性への問」（Die Frage nach dem Sinn von Sein, d.h. nach den der Wahrheit des Seins）である。そういう意味での「有の問」（Seinsfrage）もしくは「有の問題」（Seinsproblem）は、彼にとって「無くてなならぬ一事」（unum necessarium）」である。」（105）

「問題の立て方」は「一つの根本経験」に基づいている（106）。

Es geht diesem Seienden in seinem Sein um dieses Sein selbst.

「この命題が何を意味しているかということ」

「(a)「現有」がその有において「一つの問」であり、「関心」であること。

(b)「現有」が「世界の―内に―有ること」（in-der-Welt-sein）であること。

(c)「現有」が「死への有」（Sein zum Tode）であること。

(d)「現有」がその有において一つの《Gehen》であり、《Be-weg-ung》であり、従って《Auf-einem-Weg-sein》であること。それは、「現有」が「時性」（Zeitlichkeit）であり、「歴史性」（Geschitlichekeit）であることを示している。

(e)

(f)

(g)・・・」（111）

８．森一郎『死と誕生――ハイデガー・九鬼周造・アーレント』東京大学出版会、2008年。

「死に関する」「三つのありがちな見解」

「１　死をわれわれは他者の死としてしか経験できない。

２　死を超えた不死や永遠というものがある。

３　問題なのは死が現実に訪れるときであり、かつそのときのみである。」（157-158）

「第一の解釈学的反転」

「死とは「本質上そのつど私のもの」」（158）

「死という非存在に裏打ちされることで存在が無にそくしておのれを現わすという逆説的現象」、「「死への存在」の自覚を掴みとった「本来的自己」」（159）

「第二の解釈学的反転」

「現存在分析論においては、「不死」や死後の「永遠の生」は、問題とならない」（163）

「ハイデガーの「終わりへの存在」の概念は」「まっすぐ「時間の有限性」のテーゼにつながっている。その場合の「有限性」が、不在のまま臨在する終わりの到来として考えられているとすれば、そのような「瞬間」に「時熟」する現存在の時間性とは、まさに「終末論的(eschatologisch)」と言うべきであろう」(167)、「キルケゴール」「パウロ書簡の「瞬間(*kairos*)」論が、初期ハイデガーの時間概念の形成に決定的に与ったと見られる」、「キリスト教思想という背景を抜きにハイデガーの実存思想を理解することはおぼつかないのである。」(168)
「ハイデガーにおいては、不死、永遠、神といった伝統的形而上学の問題については、いやしくも有意味に哲学する気があるなら、沈黙しなければならぬ、との鉄則はすでに自明のものとなっている。要するに、「神は死んだ」という事態が、ここでは既成事実化しているのだ。」(169)
「第三の解釈学的反転」
「死を考えるさい、落命つまり死の現実化をまずもって主題とするのは、方法上かつ事実上、不適切である」、「私自身の死は、落命という仕方では、したがってまた「生身のありありとしたさま(leibhaftig)」では、決して経験できないから」、「現実化には至らない純粋な可能性としての自己自身の死との間柄こそ、問題の中心」(169)
「了解(Verstehen)」とは、「存在可能(Seinkönnen)」の会得である」、「企投とは、構想し計画すること、つまり可能性を先取りして描くことなのである」、「現存在の時間性」のうちの「将来の優位」、「可能性としての死」(170)、「実存のカテゴリーとしての可能性」(171)
９．小野真『ハイデッガー研究――死と言葉の思索』京都大学学術出版会、2002年）
http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/49764

（３）聖書における死の思想
・ハイデッガーは死また人間の十全な理解を提示しているか？　なおも平板的？
・死の両義性（有限性・本来性と罪責性)、罪責性は有限性に還元されるのか。
10. 聖書の中心は死ではなく生にある。彼岸的ではなく此岸的。
　この世へと到来する神の国。→　哲学（プラトニズム）との相違・対比。
大林浩『死と永遠の生命――そのキリスト教的理解と歴史的背景』ヨルダン社、1994年。
11. パウロ：死の二重性、いわば身体的でありまた霊的・精神的。
5:12 このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。
5:14 しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。
5:15 しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。
5:17 一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。
8:2 キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。
8:10 キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。
12. ティリッヒ『組織神学』第一巻（新教出版社。原著1951年）
・「存在と神」：本質存在。有限性・創造の善性・死　→　第一の死。
　　と
「実存とキリスト」：実存存在。罪、罪責性　→　絶望は死に至る病である。